

「いのち」の重み

静岡県 長泉町立長泉中学校 3年

山本 桃子（やまもと ももこ）

夏休み、祖父を訪ねると祖父は食事の最中だった。おなかから出た管に、点滴のようにぶら下げられた袋から茶色い液体が流し込まれている。

「これ、おいしいのかな。」

そう少し寂しそうに言う母を、祖父は見ることもない。

祖父が胃ろう（食事を直接管を使って胃に流すこと）になったのはもう二年以上前のことだ。脳こうそくの発症から痴呆がひどくなり、話すこと、考えること、人としてできるのが当たり前だった様々なことができなくなり、最後に食べることもできなくなった。

医師から話があるとわれ、祖母と母が祖父が入院していた病院に駆け付けると、医師は

「胃ろうにしますか、どうしますか。」

と聞いた。母はその時初めて胃ろうにしないという選択があることを知り、

「胃ろうにしないとどうなりますか。」

と問い返した。すると医師は

「申し上げにくいですが、簡単に言うと徐々に体力が弱まります。栄養がとれないわけですから。」

と答えた。祖母も母も胃ろうにしないという選択はできなかった。飢え死にさせることになると思ったからだ。胃に管を通す手術はあっという間に終わり、それから二年、祖父は生きている。

でも胃ろうでは満足に栄養がとれないのか祖父はやせ続け、七十キロ近くあった体重も今は四十七キロしかない。足は人と思えないほどおかしい形のまま硬直し、私の腕と同じくらいの太さしかない。細すぎる足やおなかから出た管、そしてただ眠ることしかできない祖父を見て、母は

「胃ろうの選択をしたことが正しかったのか今でも分からない。お父さんをただ苦しめているだけなのかもしれない。」

と言う。

私は毎日朝起きて、顔を洗い、食事をして着替えて学校へ行く。考え、話し、食べ、笑い、歩き、走る。それがどれだけ幸せなことか祖父を見ていて分かる。祖父にはもう脳の働きがほとんどないのだという。音を感じることはできても、音の意味を理解しない。目に映るものは見えても、それが何であるかは分からな

い。できるのは、そこにいて、ベットに横になっていることだけだ。

祖父は今のこの姿を望んでいるのだろうか。幸せなんだろうか。はがゆい思いが沸き上がるけれど、母も祖母も結論が出せなかったように、私にもこの問題は重すぎて、答えを導き出すことができない。それは祖父の人としての在り方、「いのち」の問題そのものだからだ。

祖父をもはや人でないと言ってしまうのは簡単だ。でも家族はそうは思えない。祖父は祖母が来たことなんて分からないのに、祖母は二日に一回は祖父のもとへ通い、のびたひげをそり、歯をみがき、耳のそうじをして

「また来るからね。」

と言って帰る。何も分からなくなり、何も言わないけれど、祖父は家族にとって祖父なのだと思う。

しかしその一方で、祖母は

「私は胃ろうにしないで。」

と言う。

「頑張って生きてきたから、自分の力で生きられなくなったら、それでもう十分。自分が自分だと分からないのに生きていても、なんだか間違っている気がするんだよね。」

祖父には胃ろうを選択し、自らは嫌という祖母。祖母にとっても祖父の「いのち」は大切すぎて、自分の意志ではその終わりを決めることなどできないのだと思う。その一方で祖父の人としての尊厳は守られていると思えない。真剣に考えれば考えるほど、答えはみつからない。

大切なのは祖父の意志だったのかもしれない。しかし祖父の意志はもう聞くことができない。母は

「お父さんはきつとこんな管、はずしてくれと言うだろうな。」

と言うけれど、

「でもね、お父さんの本当の気持ち、死を目の前にした時の気持ち、お父さんにだって元気なうちは分からなかったんじゃないのかな。」

「いのち」の重み、「いのち」の大切さ。人としての在り方の難しさ。言葉だけではなくて、祖父は「いのち」の持つ苦しみや悲しさ、それを含めた重みを教えてくれた。私は今でも祖父が幸せなのかどうなのかは分からない。でも祖父の「いのち」のある限り、その重みのつらさに向き合っていくことが、今私にできる人としての在り方だと心から思っている。